

平成23年度第2回「市民と市長のまちかどトーク」開催概要

- 1 日時 平成23年11月27日（日）午後2時00分～午後3時30分
- 2 場所 小田原ラスカ 6階U-m e テラス
- 3 開催テーマ いのちを守る小田原～大震災を踏まえたまちづくり～
- 4 参加者
 - (1) 一般市民：63名
 - (2) 市側出席者：市長、加部副市長、大野副市長、時田企画部長、
本多市民部長、柳田防災部長、井澤環境部長、
広報広聴課（事務局）
- 5 意見交換の一覧（テーマに関する意見）
 - (1) 津波が襲ってきた場合の避難場所について・・・・・・・・・・ 2
 - (2) 避難訓練について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
 - (3) 西湘バイパスの耐震性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
 - (4) 救援物資について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
 - (5) 仮設住宅の場所について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
 - (6) 酒匂川の堆砂について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
 - (7) お知らせの方法、防災メールについて・・・・・・・・・・・・ 8
 - (8) 避難勧告、帰宅避難者への対応について・・・・・・・・・・・・ 9

意見交換の概要

(1) 津波が襲ってきた場合の避難場所について

- ・津波が襲ってきた際、近くの高いところに逃げるということだが、私の自宅の近くにはカルチャーBONDSがある。カルチャーボックスまで逃げれば大丈夫か。

加藤市長

- ・市役所の海拔は11.1メートルである。日本たばこさんの辺りは海拔十数メートルある。カルチャーBONDSまで逃げればおそらく大丈夫であろう。

(2) 避難訓練について

- ・災害は忘れた頃にやってくると言われている。私は、子どもを持つ母親である。子どもたちが大人になったときに災害がくるかもしれない。小学生の頃から学校で避難訓練を行ってきた。しかし、真剣に避難訓練をしたことはなかった。3月の東日本大震災では、震災の怖さを教えてもらった。その怖さを受け継いでいかなければならないと思った。学校、地域、家庭で教えていかないと忘れ去られてしまい、同じことを繰り返してしまう恐れがある。市では、避難訓練をどのように受け継いでいこうと考えているか。

加藤市長

- ・とても大事なことである。この地域の方は地震がいつやってくるかわからないと言われ続けてきて、年に何回かの避難訓練を行っている。避難訓練では、机の下に潜り、防災頭巾を被ってグラウンドに避難している。いつも同じ訓練をしている。子どもたちの危機感や恐怖心に繋がってはいないようだ。それはご自身の体験からもわかるだろう。

- ・釜石市では実際に危機感を持つような避難訓練を行ってきたと聞いている。釜石市では、かつて10メートル近い津波が襲ってきて、どこまで被害があつて何千人が死亡したという記述が残っている。それを踏まえて、ここまで避難しなければいけないという石碑がたくさんある。そのような記憶を掘り起して、小学生や中学生の記憶に徹底的に植え付けていたのである。津波は平地では時速30キロメートル位の速さで襲ってくるので、実際にグラウンドで走らせ、一緒に避難する際は手を引いて逃げ、500メートルの坂を駆け上がるといった訓練を何回も行っていた。そのため、当初ここまで避難すればよいと決めていた場所よりも更に遠く、高い所まで逃げる事ができた。これは訓練をしっかりと行ってきたから実際に逃げる事ができたのだろう。
- ・小田原市は、今まで津波の避難訓練は行っていない。揺れから身を守る訓練しか行ってこなかった。津波の避難訓練を子どもたちに伝えるのは難しいかもしれないが大事なことである。釜石市の方は、防災講演会を開催すると関心のある方しか参加されない。これは学校のPTAの活動と同じだ。大人たちにアプローチをするよりは、子どもたちにしっかり伝え、子どもたちから各家庭に伝えることの方がはるかにインパクトがある。小中学生にいざというときの地域防災の担い手としての意識を伝えていくという防災教育を行っていくべきだ。その小中学生が大人になり、親になり、未来に伝わっていくような教育をしたいと、おっしゃっていた。
- ・災害はいつ襲ってくるかわからない。十分に気を付けていただきたい。

(3) 西湘バイパスの耐震性

- ・西湘バイパスがどの程度の津波や地震に耐えられるのか。

加藤市長

- ・地域の皆さんにとって、西湘バイパスは防波堤の役割を担っているかもしれない。
- ・南相馬市の沿岸を歩いたが、堤防が打ち砕かれていた。コンクリートの構造物は大丈夫かなど思ってしまった。3月の東日本大震災の際に襲ってきた津波の威力はとても大きい。テトラポットやコンクリートをいとも簡単に動かしてしまった。
- ・西湘バイパスが、東日本大震災で発生した津波のような規模に対応する強度があるかはわかりかねる。ただ、相当程度のものには耐えられるということは間違いないと思う。どのような地震や津波が襲ってきても、西湘バイパスには耐えてほしいが、今実際に数字のお答えはできかねる。中日本高速道路（株）に確認し、後でお知らせさせていただく。

防災部長

- ・西湘バイパスの耐震性がどの程度あるかは防災対策課も把握していない。しかし、4月以降海岸線沿いを歩いてきた中で、西湘バイパスの橋脚の部分の耐震の強化を行っていたように見受けられた。数字的に、西湘バイパスの耐震性がどの程度あるかはお答えいたしかねる。

発言者

- ・橋脚についてだが、砂が堆積している。高さだと3、4メートル位になるかもしれない。津波の高さが3、4メートルであれば耐えられるということでよろしいか。

加藤市長

- ・津波の高さが3、4メートルのレベルは耐えてもらわなければ困る。砂の堆積についてはテトラポットを覆うように砂が溜まっており、残っている高さはだいぶ低くなっている。建造物の強度については確認させていただく。

対応状況

中日本高速道路（株）に西湘バイパスの耐震性について確認をした。

以下のとおり、12月2日（金）に、発言者に電話で回答した。

NEXCO中日本からの回答

- ・西湘バイパスはどのくらいの地震に耐えられるか。

平成7年1月17日に発生した兵庫県南部地震（阪神淡路大震災）クラスでも、大きな損傷が発生しないようにするため、特に橋を中心としたコンクリート構造物の耐震対策について工事を進めている。

- ・西湘バイパスはどのくらいの津波に耐えられるか。

現状では、津波に対する指針はないが、小田原市浜町付近の当該道路の海拔は7メートルから8メートルであり、これを越えない津波には耐えられるものと考えている。

（4）救援物資について

- ・高齢化が進んでいる。幸いなことに、高台に住んでいるため津波の心配はないが、地震があった場合の広域避難所は富水小学校である。そこは、低いし、川を渡らなければ辿りつかないが、橋が落ちたら富水小学校には行くことができない。現在、独自に仲沢の集会所と広場に避難するよう勧めている。そのような場合、救援物資などが届かないということが心配である。小学校のような場所であれば、救援物資などは届くであろう。それ以外のところにもなんとか救援物資が届くようにしてほしい。
- ・書き出したものを持参したので検討して、回答をいただきたい。

加藤市長

- ・富水小学校は広域避難所である。臨時的な避難、または避難生活が長期にわたる場合の地域の避難生活の拠点になっていく。災害の状況に応じて集落ごとに生活をしていくことも考えられる。最終的に皆さんに腰を据えていただく計画を策定していく必要がある。
- ・狩川を渡らなければ富水小学校に行くことはできないということだが、震災発生直後に必ずしも富水小学校に行かなければならないということではない。災害の種類にもよるが、状況で判断していただくことが大事である。実際に地域に応じた行動するマニュアルを作成することが大事である。水害、揺れ主体の災害、背後に崩れるような山がある場合などに応じ、救援物資などの物流のルートも変わってくる。一時も早く皆さんの生活の現場まで救援物資を届けたいが、3日分の食料については、ご自宅、ご自分で備えていただきたい。
- ・高齢化ということだが、いつも決まった方が地域の仕事をやっている。できるだけ多くの方、特に若い方に参加してもらえよう知恵をしぼって取り組みたい。

(5) 仮設住宅の場所について

- ・万が一、地震が襲ってきた場合、小田原市では仮設住宅が建てられるような場所の確保はできているか。

加藤市長

- ・広域避難所が設置されているグラウンドに設置するケースが多い。一義的には小田原市も公共管理のグラウンド関係を第一候補に選定していく。場所によっては民間の遊休地などをお貸しいただくこともある。久野の公園も予定地に入ってくる。被災の様子によって場所の選定を行っていく。
- ・明確に仮設住宅の場所が決まっているわけではない。

(6) 酒匂川の堆砂について

- ・酒匂川の沿岸に住んでいる。津波がどこまで襲ってくるのか検討し、情報をオープンにしてほしい。
- ・酒匂川は急流河川である。堆砂が多い。毎年山北や静岡から堆砂が流れてきている。神奈川県小田原土木事務所をお願いをしているが、堆砂を除去しないと川底が上がってきてしまう。

加藤市長

- ・県で津波の被害想定の見直しの作業を行っている。以前の津波を伴う災害になぞらえてみると、鎌倉市は14メートル、横浜市で5メートル浸水するなど、数字が先走って出ている。当然のことながら皆さんと情報をしっかり共有していかなければならない。
- ・酒匂川の遡上については、桜井地域まで津波が襲ってきたなど色々な言い伝えがある。かつてと堆砂の状況は異なるので、数字として出すのは困難だ。県からの津波の被害想定の見直しが出た場合、皆さんに報告する。

防災部長

- ・補足する。県では、11月17日から4回会議があったが、津波の被害想定の見直しの結論には至っていない。県の考え方としては、津波発生の頻度は低いですが最大クラスの被害をもたらす津波を想定して被害想定の見直しを行っていると聞いている。11月24日の津波対策推進会議が県で開催された。そこで津波の浸水予測図の素案を示されたが、そこで決定というわけではなかった。専門家の意見と共にその素案を基にこれから3月まで取りまとめていくという話であった。11月26日にも県の会議があったが、小田原市に

はデータは届いていない。来週以降会議があるので示されていくのではない
か。浸水予測図が確定したら、皆さんにお知らせしたい。

加藤市長

- ・酒匂川については、堆砂が進行している。台風などの被害も大きかった。津波にかかわらず、酒匂川の堆砂について2市8町で取り組んでいくこととしている。

(7) お知らせの方法、防災メールについて

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・浸水予測図の確定は3月と先ほど聞いたが、どういう形で皆さんにお知らせする予定か。 |
|---|

加藤市長

- ・手段はあらゆる方法で行っていく。県から浸水予測図の確定をもらわなければいけない。また、できるだけ早くお知らせしたい。

発言者

- ・防災メールに登録している。「検討している」、「〇〇に掲載した」などの情報を事前に防災メールでお知らせしてほしい。注意して情報を取得することができる。

加藤市長

- ・印刷物を事前にお知らせすることで、意識を持って見ていただくことができる。この意見は受け止めたい。

防災部長

- ・浸水予測図は県が確定させる。市ではそれを置き換えて、ハザードマップを作成していく。地図であるため、防災メールに載るようなものではない。
- ・目で見てわかるよう印刷物にして皆さんにお配りしたい。

加藤市長

- ・ホームページに公開しましたなどの一言を防災メールで配信する形でよろしいか。

発言者

- ・親は印刷物を見るが、若い方は紙や印刷物を見ない。若い方は、携帯で情報を知る。

加藤市長

- ・若い市職員もいるので、そのあたりは充実していきだろう。

(8) 避難勧告、帰宅避難者への対応について

- ・3月の東日本大震災や台風15号において、実際に避難所に行ってみた。東日本大震災の際は300名、台風の際は数名が避難していた。
- ・避難勧告が発令されて、避難しなければならないという市民の意識が低い。避難しなければならない時に避難してないことについて、市民にどのようにお知らせするのか。
- ・3月の東日本大震災が発生した場合の帰宅困難者に対して、市民や市としてどのような工夫をする予定か。

加藤市長

- ・台風15号での避難者は、10万人が住んでいる対象地域で最終的には全体で数百人であった。伝える方法がどのようであったかということ、市民の皆さんが避難勧告や避難指示があったらどのようにすればよいかはわからなかったのではないかと。これは、市が事前にルールの伝達できていなかった。避難勧告を発令する側の認識、避難勧告を受け止める側の認識、伝える手段で大きな問題があったことは間違いない。このような状況で、再び避難勧告が発令されても避難しなくてもよいのではないかと市民に思われてしまう。避難指示が発令された場合は、確実に避難していただくよう情報伝達や啓発の仕方を徹底したい。課題はたくさんあるが、まずは避難していただきたい。
- ・帰宅困難者の受け入れについて、台風15号の際は国際医療福祉大学など、自発的に多くの方に協力していただいた。今後は今回の経験を踏まえ、帰宅困難者の受け入れについての協定を小田原駅周辺の主要な施設と結ばせていただく予定で作業を進めている。災害が長期化した場合の食料などはどうするか、住民の方の避難についても大きな問題である。小田原市地域防災計画の中で検討していく必要がある。
- ・帰宅困難者についてだが、3月の東日本大震災の際の鉄道会社の対応が冷たかったが、台風15号の際の鉄道会社は乗客を駅などに滞留させていた。このことから鉄道会社も含めて役割分担を考えていかなければならないだろう。
- ・報告をさせていただく。二宮尊徳先生のご縁で、福島の被災をされた市町村に対する支援活動をこれからも継続していく予定である。10月に報徳サミットに出席した。加盟18市町村で相馬市、南相馬市、大熊町、浪江町、飯館村の5市町村について、子どもたちに対しての支援をしていくことに決まった。既に小田原市では相馬市に対しての金銭的な支援、いわゆる推譲は1000万円を越え、送金させていただいた。同じように親御さんを失ったお子さんや放射能汚染でふるさとに帰れないお子さんの教育環境の支援を行っていくことになった。皆さんにもお力添えをいただければありがたい。

- 釜石市では、子どもたちと共に逃げる、そして竹で作ったタンカで高齢者や障がい者の皆さんを誰が運ぶという津波避難訓練に取り組んでいたという報告を受けた。地域の若者は頼りになる。中学生を巻き込み、郷土の一因となってもらようよう協力していただきたい。